essay

「いただけない」話

消費生活アドバイザー
赤城　由紀

仕事でお世話になっている人たちへの手土産に、薄皮のお饅頭を買いました。ひな祭りに因んで売っていた雪達磨のような顔形をしたお饅頭です。

いまどきお饅頭は珍しくもありませんし、手土産が必要という場所でもありませんでしたが、あどけない顔形にひかれ、しかもこの時期にしか売っていない季節限定品という魅力も手伝って、ついつい買ってしまいました。

会社でお饅頭を配りながら、お礼とは別に、それぞれから返ってくる言葉や反応が、一人ひとり個性的でとても楽しいものだと思いました。

好き嫌いがあるのか、「中には何が入っているのか」という質問を受けました。誰かに買ってあげようという気持ちがあるのか、「どこで売っているのか」「いくらするのか」という質問ももらいました。

「おひなさまは二人並んでいたほうがいいから」と、ちゃっかり二つもらうことのできる人は、本当にうらやましい性格だと感心させられました。

そんな中で面白く思ったのは、「こういうものは、どこから食べればよいか」という難問です。

「まず、首を取ってしまって、体から食べてはどうか」とか「顔の皮を剥いでしまえば食べやすい」など、時代が時代だけに知らない人が聞いたら恐ろしくなるような会話が飛びかいました。

「顔が付いていることを何故そんなに気にするのか」と、ためらうことなく、あっという間に食べてしまった人を、ほんの少し羨望の目で眺めました。空腹とは、やはり何ものにも勝るものなのかもしれません。

私も顔の付いたものを食べるときはひとしきり悩むほうです。

可愛ければなおさら、しばらく飾ったり眺めたりして、意を決して食べる頃には、いい加減乾いたり美味しくなくなっているという始末です。

尾頭付きの魚なども、「生きている姿をそのままに」などというキャッチフレーズが付きそうな見事

なお料理が出てくると、いささか閉口してしまいます。

テレビのグルメ番組で見るような調理済みの豚の顔や牛の顔にお目にかかったことがないのは、幸せというものかもしれないと思っています。

食事をするときの「いただきます」という挨拶は、「これから目の前にある食べ物の生命を頂戴させていただきます」という意味が込められているのだということを聞いたことがあります。

食べ物に「顔」が付いていることによって、まさにその生命と対峙する思いが強められるせいでしょうか。何か思いを込めていただかないと、申し訳ないような真摯な気持ちになるのは確かです。

料理を拝見したり鑑賞したり、マナーよくいただこうとする思いや姿勢を抱かせるのは、料理をしてくださった人への礼儀のほかに、食べ物の生命をいただくことに対する感謝として当然のことなのかもしれないと思います。

スーパーなどで売っている魚の切り身やドレス（頭と内蔵を取り除いてある）ものは、家族人数が少なく忙しい現代人には大変便利なものだとは思いますが、この「食べ物の生命と向き合う」緊張感や畏怖の念は薄れてしまったように思います。

野菜や果物も、葉やひげや根を取ってしまってあると、それぞれが放つ香りや息吹はか弱いものになってしまいます。

生命というのは、始末に厄介なものや汚いところ、グロテスクなものにこそ感じとることができるのかもしれません。

この厄介な食べ物の生命と向き合う必要がないということは、確かに気楽で有り難いことです。

「早く」「手際よく」「安く」「美味しく」「栄養バランスよく」といった調理ポイントのうち、今の忙しい世の中では「早く」という要素は、残念ながらかなり重要な位置を占めています。一々食材の生命にまで想いをめぐらせ、気骨を折っている暇などはありません。

とはいえ、よく考えてみると本

赤城　由紀（あかぎ　ゆき）さん

札幌市生まれ。
北海道大学文学部行動科学科卒業後、コピーライター、短大研究員北海道女子短期大学、光塩学園女子短期大学非常勤講師等を経て、現在、シンクタンク外部協力研究員を勤める。
消費生活アドバイザー。

当はとても不遜なことをしているのだと思います。

実際に他の生命をもらいながら、そういった気が重くなるところへの思いは避けて通っています。避けるというよりも、思いが至らないという方が正しいのかもしれません。生命の重みを考えていないので、文句は簡単に言えても感謝はたいしてしません。

ただ、尊い生命の存在を感じとり感謝することのできない食べ物から、果たして栄養や元気をもらうことができるのかはちょっと疑問です。

私たちは忙しさに紛れて、食べ物も食べ方も食べること自体も大切にしなくなっています。

忙しい人たちの食生活は、まさしく「エサ」になってしまったように見えます。

こんなに食べ物が溢れた時代にあって、不健康な人が増えている現実を前にして、「食べ物をいただく」という意味をよくよく考え直してみる必要があるのではないかと思います。

小さい子どもが好んで食べるパンやお菓子には、顔の付いたものがたくさんあります。

尾頭付きの魚は気持ち悪がって食べない子どもたちも、顔の付いたパンやお菓子はどんなに不気味な顔が付いていようと可愛いといって食べます。

もちろん味が違うといってしまえばそれまでですが、それはどこかで、生身のペットを飼わずに、不死身のバーチャルペットやたまごっちを飼う気楽さと似たような感覚と結びついているような気がしてしまいます。

「食育」という言葉が盛んに使われるようになりましたが、食べるということは他のものの生命をいただくことなのだということをしっかりと学び教えたいものだと思います。

私自身も、たまにはそう易々といただけないものをいただく有り難さをしみじみと味わおうと、「顔」の付いたお饅頭を眺めながらあらためて思いました。